

# 第39回 自死遺族パネル展IN仙台

9月22日から25日まで日立システムズホール仙台で開催しました。東北放送、宮城テレビ、東日本放送、河北新報社、産経新聞、毎日新聞読売新聞、朝日新聞が報道。NHKは取材はありましたが放送は確認できませんでした。



火曜日

産経新聞

9月23日 サンデー新聞

## 過労などで「自死」繰り返さない！

2014.9.23

仙台でパネル展「家庭で考えるきっかけに」

〈宮城〉過労などが原因で自ら命を絶った人の生前の写真や遺書を展示するパネル展「私の中で生きていたあなた」が、仙台市青葉区の日立システムズホール仙台で開催されている。25日まで、入場無料。「自死」が繰り返されることのないよう、遺族らは「来場者が自死問題を自分自身や会社、家庭に持ち帰って考えるきっかけになれば」として開催している。

展示会は平成19年からNPO法人「働く者のメンタルヘルス相談室」（大阪市）が全国で開催。仙台市では平成20年以來、2度目となる。

### 写真や遺書100点

今回は全国から50人の遺族が参加し、写真と遺書、遺族の声を記したパネルの計約100点を展示。約30人が実名を公開している。仙台市青葉区の前川珠子さん(49)は「昨年1月に亡くなった夫の英己さん(当時48)の写真を展示した。夫は東北大学院工学研究科の准教授として、燃料電池の材料などを研究。『社会のために役立ちたい』と、いつも目をきらきらさせて研究の話や将来の夢を語る人だった」と、珠子さんは話す。

東日本大震災で研究室が全壊。長年積み上げてきた研究成果が水の泡となった上、仕事の量も膨大になった。大学に残るためには契機

その日の夜から、自身をさいなむような言葉が「噴水」のように止まらなくなるといふ。「自分だけが人間だ」と泣きながらわめき、約1週間後に英己さんは自ら命を絶った。健康で明るい性格だった英己さん。珠子さんは、最愛の夫が亡くなったことが信じられないとともに、「悔しくてたまらなかった」。

展示写真は子供が生まれたときや、家族と笑顔で過ごしているときなど、いずれも幸せな日常の風景を切り取ったものだ。珠子さんが出展を決めたのも、昨年、盛岡市で開かれた展示会に初めて訪れたとき、自死がテーマなのに亡くなった人々の写真が、いずれも明るく感じられたことが理由だった。

亡くなった夫の写真パネルの前に思いを語る妻の前川珠子さん —22日、仙台市青葉区 (安藤歩美撮影)



人間は機械ではない 「人間は機械ではなく、限界を超えたら壊れてしまう。ごく普通の幸せな日常を過ごしていた人がこうなってしまうのだということ、多くの人に伝えたい」。珠子さんは実名での展示を通じ、問題の身近さと深刻さを投げかけている。

珠子さんは、遺族らでつくる「東北希望の会」の代表を務めており、23日には午後1時半から同施設で、遺族や弁護士らで自死問題を議論する「自死遺族フォーラム」(入場無料)を開く。

# 自死遺族の心情理解を

2014年9月28日 仙台市民団体がフォーラム

過労や人間関係などで「えいご」と呼び掛けられ、追い込まれ命を絶った人。その家族の心情に理解を深めてもらうべく、仙台市の市民団体「東北希望の会」は23日、青葉区の青年文化センターで「自死遺族フォーラム」を開いた。約50人が参加。東北希望の会の前川珠子代表(49)は、過労で夫が死を選んだ際の孤立感などを振り返り「当事者が支え合える環境づくりについて社会全体で考

会場では、フォーラム

に協力している大阪市のNPO法人「働く者のメンタルヘルズ相談室」が自死で亡くなった人の生前の写真や家族のメッセージなどを並べたパネル展を開催。6年前に夫を亡くした青葉区の女性(39)は「見た人が自死について当事者意識を持つきっかけになってほしい」と話した。パネル展は5日まで。連絡先は同法人06(6242)8596。



自死遺族らが体験を語ったフォーラム

# 「自死」理解を 仙台でフォーラム

「自殺」からの言い換えが進む「自死」という言葉を知ってもらおうと23日、NPO法人が仙台市青葉区でフォーラムを開いた。防災問題に詳しい弁護士は「心が弱いから自死するのはではない」と訴えた。全国で心の健康問題対策に取り組むNPO法人「働く者のメンタルヘルズ相談室」(大阪市)が「自死」の言葉の意味や遺族の思いを伝えようと開いた。遺族への配慮から、公文書などで自殺を自死と言い換える動きが相次いでいるが、市民の間では、浸透していないという。

登壇した前川珠子さん(49)の夫・英己さん(当時48歳)は2012年1月に自ら命を絶った。経験をもとに、前川さんは「遺族や周りの人たちがお互いを助け合える社会にして欲しい」などと参加者に呼びかけた。

仙台弁護士会の土井浩之弁護士は「心が弱いのではなく、むしろ責任感の強さから、限界を超えて死を選んではしまう」と、実例を交えながら話した。



遺族らが「自死」に関する思いを訴えたフォーラム

# 自死遺族がパネル展

自ら命を絶った人や遺族の思いをパネルにまとめた「自死遺族パネル展」が22日、仙台市青葉区旭ヶ丘3の日立システムズホール仙台で始まった。大阪市のNPO「働く者のメンタルヘルズ相談室」の主催で、50人の生前の写真や遺書が展示され、遺族は「誰が遺族になってもおかしくない。かけがえのない家族を大切にしてほしい」と訴える。2012年1月に東北大の研究だった夫英己(ひでき)さん(当時48歳)を亡くした仙台市青葉区の前川珠子(たまこ)さん(49)は今回、夫が働くスナックや家族写真を展示した。過労自死遺

族の自助グループ「東北希望の会」を設立し、集会や講演を続けてきた前川さん。昨年、盛岡市で開かれた自死遺族のパネル展を見た。「写真の一枚一枚が奇麗で、それだけに幸せが一瞬で壊れうることが実感できた。声をかけるだけで救える命もある。展示を見て、かけがえのない家族の大切さを実感してもらえれば」。5年に息子を亡くし、遺族の集いを主催してきた仙台市の田中幸子さん(65)は、多くの不幸が生まれた震災後、自死問題を語りにくい雰囲気を感じてきた。「仙台で展示を開けたのは意味あること。自死は追い

英己さんの写真を見て「最近ようやく死を受け入れ、涙が流せるようになりました」と話す前川珠子さん—仙台市青葉区で



込まれた夫の死。展示を見て関心を持ってほしい」と話す。展示は25日まで。23日午後1時半から弁護士や遺族によるシンポジウムも開



かれる。前川さんと、労災に詳しい土井浩之弁護士が講演する。無料。問い合わせは同相談室06・6242・8596。

【伊藤直孝】